

ペダルがなく、地面を蹴って進むタイプの子供向け二輪車が人気だ。遊びながらバランス感覚を養えるというところで、補助輪を外した「自転車デビュー」の練習用としてのニーズも高まっている。

# 「自転車デビュー」

## ペダルなしから

## 「バランス感覚身に付く」

要領をつかんでくる。

「1、2のピヨーン!」。3月上旬の日曜日、神奈川県立辻堂海浜公園（藤沢市）で開かれた「30分で乗れる自転車教室」。ペダルのない二輪車にまたがった幼児が、インストラクターの掛け声に合わせて、地面を蹴って進むと、傍らの親が頼もしい表情を見せる。

一般社団法人「親と子の課外活動部」（同県厚木市）が2013年から展開するイベントの一コマ。全国各地の公園や商業施設で年200回近く開催され、この日は開始時刻の午前10時前に親子96組の定員が埋まった。

「またがって歩く」「車体を傾けて曲がる」「ブレーキで止まる」「地面を蹴って進む」。教室は前半20分で、自転車に乗るための一連の動作を学び、後半20分で、着脱式のペダルを着けて「こいで進む」。最初はハンドルやサドルを支えられながらだった子供も、次第に

## 地面蹴り走行 軽く幼児でも扱いやすく



ペダルなし二輪車を使った自転車教室（神奈川県藤沢市）

長女（5）を連れた横浜市金沢区の男性公務員（36）は「こぎ出しのふらつきが課題だった。地面を蹴る練習で、バランスをとるコツをつかめたようだ」と笑顔。孫娘（4）を見守っていた藤沢市の男性会社員（62）は「昔は転びながら乗れるようになったけれど、今は効率重視だね」と話していた。

「幼児の体格に合った重さやサイズを追求した」。教室で使用する「へんしんバイク」を販売するビタ

ミニファクトリー（東京・渋谷）の渡辺未来雄社長は話す。着脱式のペダルが特徴で、前後輪のブレーキも装備。「倒れた車体を自力で起こせることも成功体験になる」（渡辺社長）と、ペダル込みで約7キロと従来の子供用自転車の約半分まで軽量化した。

「キックバイク」「ランニングバイク」とも呼ばれるペダルなし二輪車は、09年に米国から輸入された「ストライダー」で本格的に普及。ペダルもブレーキもない分、車体は3キロとさらに軽い。

輸入代理店ストライダージャパン（東京・杉並）広報の大縄あいりさんは「軽く扱いやすい乗り物を幼児から楽しんでもらうのが本来の狙いだが、バランス感覚が身に付くので、自転車の練習用と考える保護者も多い」と話す。

へんしんバイクは「30分で乗れる」と打ち出されてから売り上げが3倍に。ストライダーは国内販売台数が累計60万台を突破した（17年2月）。一方、補助輪も想定した従来の幼児用自転車の取り扱いは「縮小傾向」（国内大手メーカー）だという。

自転車の専門家をつくる「自転車の安全利用促進委員会」（東京・渋谷）の遠藤まさ子さんは「都市部を

中心に自転車の置き場所も練習場所も減り、親が持ち運びもしやすいキックバイクのニーズが高まっている」と分析する。

実は従来の自転車でも「ペダルなし」の練習法は珍しくない。東京都新宿区の神宮外苑や、堺市堺区の大仙公園で実施されている教室では、ペダル部分を外した自転車で、地面を蹴ってバランス感覚を身に付けてから、通常の自転車での練習に移行する。

50年近い歴史があるという神宮外苑の教室は、日本サイクリング協会（東京・新宿）のインストラクターが指導。責任者の土田正友さんによると、1日で3〜4割は乗れるようになるという。

「ストライダーでは遊んでいたが、自転車は実家でたまに補助輪付きに乗っていた程度」。新宿区の主婦（33）は長女（5）が2時間程度で乗れるようになり、驚いた様子。早速娘の希望でレンタルサイクルを申し込み、親子でサイクリングコースに繰り出した。

土田さんは「バランスに慣れる必要があるのは自転車もキックバイクも同じ。車体を傾けて曲がれるようになれば『合格』は近い。あとは足ではなくブレーキで止まれる練習をしてほしい」という。